

東京のアーケード商店街における都市環境と側面建築物の研究 (その1)

- 全蓋式アーケードと都市環境の関係性に関する分析 -

正会員 ○大沼邦雄*
 正会員 渡邊雄三**
 正会員 松岡恭子***

アーケード空間 商店街 商業街路
 半屋外空間

1. 研究の背景・目的

東京のアーケードは初期のもので昭和前期に建設が始まった。現在 60 年以上経過している中で、近年は商店街活性化のために撤去や新規架け替えといったアーケードそのものを見直す事例が見受けられる。しかしその際に建築・都市的視点からの調査分析は行われていないと思われた。そこで本研究は基礎調査として、東京におけるアーケードの分布状況並びに周辺環境を調査し、どのような現況か知ることを目的とする。

2. 研究方法

東京 23 区と武蔵野市を調査対象とし、その中で全蓋式アーケード計 37ヶ所（アーケード商店街 35ヶ所）を対象とした。これに実地調査及び航空写真、ゼンリン住宅地図上での測定を行った。また本研究では図 1 のように用語を定義する。

3. 分析

3-1 分布

37ヶ所のアーケードは、山の手線内側には存在せずその周縁部の独立住宅、集合住宅が多い地域に分布しているが、用途地域自体は商業・近隣商業地域であった。

3-2 類型化

航空写真上にアーケード 400m 圏内の幹線道路、鉄道、

ランドマーク等をプロットし、そこから全アーケード商店街を図 2 に示す 3 種とこれらに当てはまらないものに類型化した。①シンボル型：駅出口またはロータリー等からアーケードが掛けられたもの、数はこのタイプのものが最も多く、半数以上がこの形式に分類できる。②並行型：商店街に幹線道路が並行して走っているもの。また並行型は同時にシンボル型としても分類できる。③面型：商店街単体で構成されているものではなく複数のアーケード商店街で成り立っているもの。

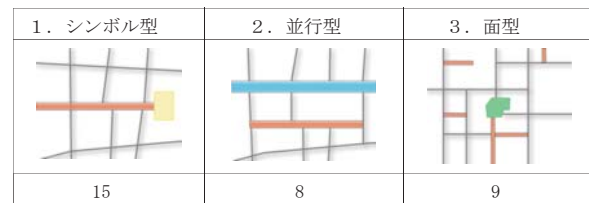


図2 アーケード商店街類型別総数

3-3 項目別分析

全てのアーケードに共通する傾向を導くため、全アーケードに対して図 3 の 7 項目を計測した。これ以降、面型に含まれない総延長 100m 以下の物は他の商店街との比較時に、活動や店舗数等の規模が特殊であるため分析時にサンプルから除外した。

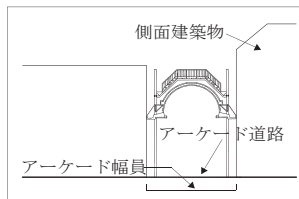


図1 アーケード断面と用語

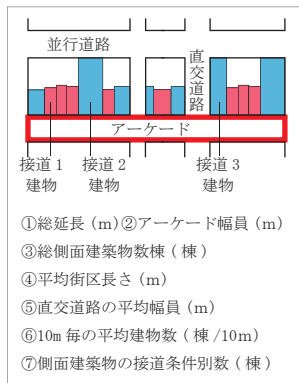


図3 調査の7項目

区	商店街名	類型	総延長 (m)	幅員 (m)	直交道路平均幅員 (m)	平均街区長さ (m)	総建物数 (戸)	接道1建物数 (%)	10m毎の平均建物数 (戸/10m)
板橋区	ハッピーロード大山	シンボル	560	7	3.56	88.58	145	68.3	1.36
大田区	京急蒲田	シンボル	390	5.5	3.93	83.61	94	78.7	1.25
葛飾区	金町すずらん	シンボル	325	6.3	2.57	90.29	47	61.7	0.74
杉並区	高円寺パル	シンボル	243	5.3	6.29	49.11	71	59.2	1.61
大田区	雑色	シンボル	230	5.8	2.83	75.83	49	73.5	2.15
北区	十条銀座	シンボル	525	5.4	2.94	76.69	155	81.3	1.55
北区	赤羽一番街 シルクロード	シンボル	122	4	5	58.5	44	70.5	1.88
品川区	中延	シンボル	350	6	2.39	83.31	100	84	1.5
葛飾区	立石駅前通り	シンボル	115	5.6	3.17	55.13	33	72.7	1.5
荒川区	ジョイフル三ノ輪	並行	410	4.8	2.31	68.45	135	85.9	1.79
葛飾区	ルミエール	並行	440	6.4	4.63	44	118	63.6	1.49
杉並区	阿佐谷パルセンター	並行	581	5.5	3.07	68.59	152	59.9	1.38
大田区	蒲田西口銀座通り会a	並行	310	7.6	5.58	73.31	78	71.8	1.33
大田区	蒲田西口銀座通り会b	並行	160	4.4	5.5	77.25	56	83.9	1.81
台東区	佐竹	並行	360	7	4.74	45.68	89	77.5	1.39
中野区	中野サンモール	並行	222	5.4	2.14	69	73	79.5	1.76
品川区	武蔵小山	並行	780	7	5.78	80.25	224	78.1	1.55
台東区	浅草観音通り	面的	96	7.4	3.25	46.38	22	72.7	1.29
武蔵野市	ダイヤ街チェリーナード	面的	170	4.6	2.81	53.5	38	71.1	0.96
武蔵野市	ダイヤ街ローズナード	面的	90	3.8	3.75	42.25	22	77.3	1.06
武蔵野市	吉祥寺サンロード	面的	290	6	8.5	57.83	67	73.1	1.37
台東区	浅草すしや通り	面的	85	7.3	6	54.67	18	50	2.28
台東区	浅草ひさご通り	面的	175	7.7	4.43	39.88	49	61.2	1.58
台東区	浅草新仲見世	面的	336	5.4	6.77	59.75	108	69.4	1.54
台東区	浅草西参道	面的	100	6.5	2.88	37.7	43	46.5	1.3
台東区	いろは会	その他	370	8	5.96	41.03	90	60	1.81
北区	赤羽スズラン通り	その他	330	10	7	60.4	64	57.8	1.19
大田区	大森銀座	その他	208	7	6.92	46.81	36	47.2	1.1

図4 実地調査結果一覧

図4から図5上段の様にデータをヒストグラム化し、ここからアーケード総延長、幅員、総建物数は低い階級に半数以上の商店街が含まれており、街区長さや接道1建物比率はほぼ全ての階級に広く分布している。

3-4 2項目間分析

前項で集計した中から項目間の相互関係を導くため、2項目選定し、一方を主軸、他方を第二軸としてグラフ上にプロットした。主軸に選ばれた項目の数値の降順に各アーケード商店街を縦軸に並べ、横軸は2項目の偏差値を示す。

①、②のグラフからは比例関係が読み取れる。④アーケード道路の幅員と直行道路の幅員はほぼ近い偏差値になることが多い。一部その関係から外れているアーケード商店街もみられる。⑤も同様にみると複数の商店街を除けば両者の間に比例関係が読み取れる。10m毎の平均建物数は側面建築物の間口と反比例するので、ここから接道1建築物は間口が狭い建物が多くなる傾向があると言える。言い換えれば側面建築物はアーケード道路以外の道路に接道した物の方が間口が広く取られる傾向があると言える。それは現地調査でも確認できた。

⑥のグラフから反比例関係が読み取れば直行道路の幅員と接道1建物の間に傾向がある事が導けるが、今回の分析方法では全体として顕著な傾向は見られなかった。それでもその傾向が表れている商店街も複数見受けられる。(グラフ部)

4. アーケードと都市環境の関係性

本研究では、アーケードの共通の情報を一覧化すると共に、その傾向を数値的、視覚的に表す事が出来た。本研究で得られた結果及び仮説により、アーケード商店街とその側面建築物はその周辺の道路環境によって変化しうる事が考えられる。前項からわかるとおり、接道1建築物には間口の狭いものが多い。また③から街区が長いものも同様である。間口が狭い=低層(小規模)、間口が広い=中高層(大規模)であった。以上から接道1建築物の場合は大規模な建て替えは困難と言える。そこから建て詰まりの建物が少なく、建て替えを行い易いアーケード商店街とは、周辺環境の中でも周辺道路及び街区が広く整備されている事が重要であると考えられる。さらに精査された検証を行うために、今後本研究で述べられていない項目を用いた考察が必要である。

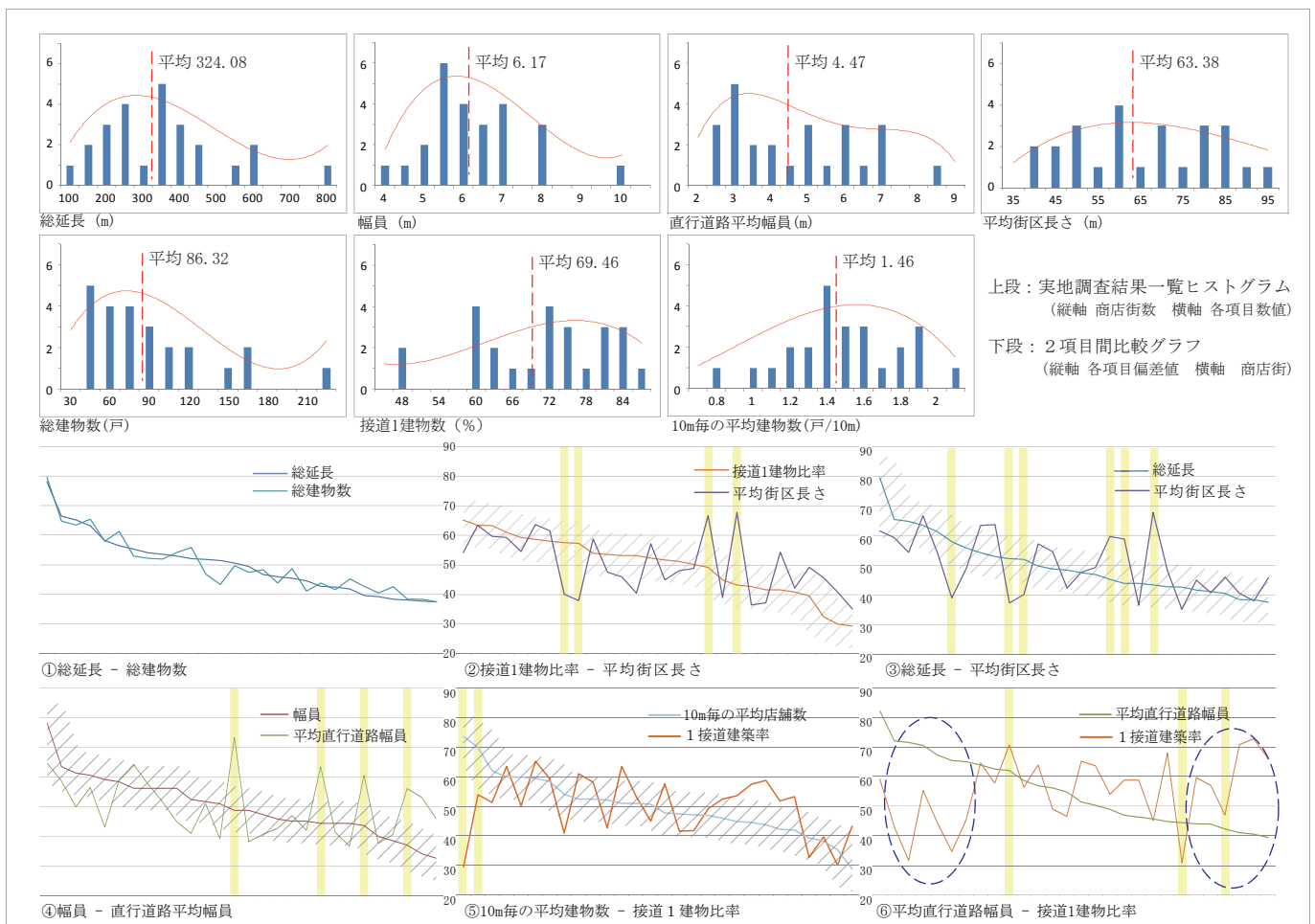


図5 項目別分析グラフ

* 東京電機大学大学院未来科学研究科 建築学専攻 修士課程
 ** 東京電機大学大学院未来科学研究科 建築学専攻 修士課程
 *** 東京電機大学 准教授・工修・MS

*Graduate Student, Tokyo Denki University
 **Graduate Student, Tokyo Denki University
 ***Associate Prof., Tokyo Denki University, M.Eng., M.S.